

『今月の天候と農作業』

通巻第5691号
9月号
令和6年9月5日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

【予報のポイント】

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高く、期間の前半はかなり高くなるでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	10	80
降水量	九州南部	30	30	40
日照時間	九州南部	30	40	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天候は平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平均気温は、高い確率80%です。

<1 週目の予報> 9月7日(土)～ 9月13日(金)

期間のはじめは高気圧に覆われて晴れる日もありますが、その後は湿った空気の影響で雲が広がりやすいでしょう。

<2 週目の予報> 9月14日(土)～ 9月20日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から4 週目の予報> 9月21日(土)～ 10月4日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆普通期水稻

1 水管理

根の活力を維持し、登熟歩合を高め登熟を促進させるために、収穫の5日前まで間断かん水が続けましょう。特に高温時には飽水管理や夜間の通水が有効です。なお、台風接近時は深水で倒伏軽減を図り、台風通過後は湛水管理を行いましょ

2 病虫害防除

穂もちやトビイロウンカの発生に注意します。トビイロウンカについては、カメムシ類との同時防除で、穂揃期とその7～10日後の2回防除を必ず実施しましょう。また、ほ場をよく観察し、発生が多い場合には、臨機防除を行いましょ

3 収穫

収穫適期の目安は籾全体の約8割が黄化した頃です。高温での急激な乾燥は、食味や品質が低下するので避けましょ

◆大豆

湿害防止のため、ほ場周囲や畦間の排水溝を整備します。開花期以降は紫斑病やカメムシ類の防除を行います。ハスモンヨトウは老齡幼虫になると薬剤の防除効果が低下するため、定期的にはほ場を観察し、早めに防除を行いましょ

◆そば

1 排水対策

そばは湿害に弱く、長時間に渡り滞水や冠水をすると生育不良や立枯れが発生します。排水溝を設けるとともに、生育期間中も排水を徹底しましょ

(福川 泰陽)

野菜（果菜類）

◆施設野菜全般

施設野菜ではきゅうり、ピーマン、トマト、いちごなどの定植が始まります。台風や降雨の多い時期となるため、ハウスの定植準備は計画的に余裕をもって行いましょう。

定植は適期に行い、早く活着させることが最も重要です。9月はまだ日射が強く、高温であるため、定植後は遮光資材等を活用するとともに、水の管理に注意しましょう。

◆きゅうり

ハウス抑制裁培の定植期です。定植後から収穫開始期までの管理で草姿が決まります。根を十分に張らせコンパクトな草姿に上げることが、収量・品質向上につながるため、定植後は株元に重点的に手かん水を行い、活着後はかん水を控えて徒長しないよう草勢を調節しましょう。

◆ピーマン

接ぎ木栽培のピーマンは、自根栽培に比べて草勢がやや弱くなる傾向があります。台木の特徴を把握して、定植後から収穫開始時期までかん水量を2～3割増やすなど草勢を強めに保ちましょう。

◆トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトの定植期となります。セル苗を2次育苗せずに、直接定植する場合は、異常茎（メガネ茎）の発生を抑えるために、定植後のかん水量を制限しますが、極端なかん水制限は初期生育に悪影響を及ぼすため、少量を多回数でかん水するようにしましょう。

◆いちご

「さがほのか」は、花芽分化に対する葉柄中の窒素濃度や苗令の影響等が少なく、花芽分化が揃って早いのが特徴です。

ポット苗の花芽分化期となる9月10日頃の2～3日前から花芽検鏡を行い、花芽が分化していることを確認して、9月中旬以降に定植します。

（境田 耕作）

葉茎根菜類・いも類

◆秋冬野菜の播種・定植

9月は、だいこんやキャベツ等の播種・定植期です。土壌が乾燥している場合は、播種・定植の前後にかん水を行いましょう。また、雨後、ほ場に雨水が溜まる場合は、排水状況を確認し、排水性を改善しましょう。

生育初期に病害虫や雑草が発生すると、減収の原因となるため、病害虫の防除を徹底しましょう。

◆にんじん

播種後の大雨で欠株が多くなった場合の播き直しは、9月20日頃までを目安としましょう。

◆だいこん

播種は9月上旬から下旬に行いましょう。10月中旬以降に播種する場合はマルチ栽培とします。

また、ホウ素が欠乏すると黒芯が発生しやすくなるため、土壌診断の結果を参考にして、基肥にホウ素入り肥料を施用しましょう。

◆ほうれんそう

播種は9月下旬から始まります。播種前にはほ場の排水状況を確認しましょう。また、土壌診断を行い、pHが低い場合は、pH6.5前後を目標に石灰資材を施用しましょう。

◆さといも・かんしょ等の収穫後の片付け

収穫残渣は翌年作の病害の発生源となります。収穫終了後に収穫残渣をほ場外に持ち出しましょう。持ち出せない場合は、地温が15℃以上ある時期に、耕うん等により、残渣の分解を促しましょう。

(中村 剛)

果樹

1 常緑果樹

◆ 温州みかん

極早生温州みかんの収穫が始まります。収穫は着色や糖度などの出荷基準に基づいて行います。また、カメムシ類の飛来が見られる時期であり、今年が多発生の傾向のため、例年以上に注意が必要です。園地を観察し、早期発見・早期防除に努めます。特に台風通過後には注意しましょう。

マルチ栽培や根域制限栽培の園地では、近年、樹勢の低下が目立ちます。収穫後は速やかなマルチ除去や戻しかん水、窒素主体の施肥や葉面散布を行い樹勢の回復に努めましょう。

◆ 完熟きんかん

9月に入ったら極小果、2果なりを中心に摘果を行います。果実の肥大促進のためにも、9月末までに摘果を終了しましょう。

結果の時期が7月中旬以降の園地や夜温が早く低下する中山間地域では、果実の肥大促進の為に秋期の夜温確保が重要です。10月上旬のビニル被覆に向け準備を進めましょう。

◆ マンゴー

後期出荷の作型では、剪定直後からたっぷりとかん水を行い、高温管理と葉面散布により新梢の発生や伸長を促進しましょう。

9月になると、日射量は真夏よりも大幅に少なくなります。内カーテンや遮光カーテンを全て開放し、十分な日照を確保しましょう。

2 落葉果樹

◆ くり

ほとんどの品種が収穫時期を迎えます。収穫は毎日、気温の低い早朝に行うことで、果実温度を低く保ち鮮度を保持します。出荷前の選別を徹底し、害虫による被害果等の混入を防ぎましょう。

2 台風対策

防風ネットの点検や、冠水対策としての排水溝の整備を行いましょう。

かんきつ類のかいよう病対策である銅剤の散布は、台風襲来前に行うことで高い効果が期待できます。

(黒木 宏憲)

花き

◆秋ギク

10月出荷作型の再電照は、総苞りん片形成後期から4日間程度実施します。

なお、栽培地域や気候により花芽の発達速度が異なるため、事前に必ず花芽を検鏡して発達ステージを確認し、再電照開始日を決めましょう。

◆スイートピー

前半は植え付け作業の最盛期です。

植え付け後1週間程度は乾燥しないように根締めのかん水を行い、その後は根の張りを良くするために徐々にかん水間隔を空けていきます。

また、植え付け後10日～2週間は遮熱効果の高い遮光資材で終日遮光し、その後は天候や時間帯に応じて適宜遮光を行いながら、徐々に光を当てる時間を増やしていきます。

◆デルフィニウム

沿海地域は年内出荷作型の定植期です。

高温による早期抽だいの防止のために、定植前の遮光やかん水によりハウス内の温度及び地温を下げます。

また、定植後も必要に応じて遮光を行いましょう。

◆トルコギキョウ

沿海地域は年内から年明け出荷作型の定植期です。

定植直後に土壤の乾燥が続くと、ロゼットの発生や切り花のボリューム不足につながるため、水管理には十分注意しましょう。

◆キイチゴ

秋出荷向けの腋芽や新芽が伸長し、収穫期となります。樹勢の維持と来年度に向けた株の養成のために枝を3～4本程度残します。

また、定期的に病害虫の防除を行いましょう。

◆ホオズキ

ウイルス病対策としては場の腐熟処理を行う場合は、カーバムナトリウム塩液剤等による古株の枯死処理を行ってから株を持ち出します。

その後、残さ分解促進資材や堆肥を投入し、月1回程度の耕うんを繰り返す、適度な土壤水分で管理することにより、土壤中に残った残さの分解を促進します。

(山塚 裕美)

畜産

◆家畜防疫対策

国内における鳥インフルエンザの発生は4月以降確認されていませんが、アジア圏においては引き続き感染が確認されています。また、豚熱は8月14日に新潟県で家畜への感染が確認されたほか、佐賀県において野生イノシシへの感染確認が続いています。これらの法定伝染病から農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を行い、農場にウイルスを侵入させないように飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。

◆家畜

受胎成績の低下等、暑熱による影響が出てくる時期です。環境と飼養管理の両面から対策を取り、家畜の体力の回復を図るようにしましょう。昼間は畜舎への風の通りを良くするとともに、換気扇や細霧装置を動かす等の暑熱対策を行いますが、夜間は急に気温が下がることがあるため、気温差で家畜が体調を崩さないように温度管理に気をつけましょう。

また、台風の襲来も予想されるため、畜舎の補修や飼料の確保など事前に対策を行いましょう。

◆飼料作物

台風の襲来により収穫が出来ないことが想定される場合は、天候に注意しながら早めに収穫するなど、良質な粗飼料の確保に努めましょう。

また、極早生イタリアンや極早生エンバクの作付け時期でもありますので、計画的な作業を行いましょう。

(藤井 真理)

特用作物

◆茶

これからの管理作業は、翌年の一番茶の収量と品質の確保のために大変重要です。こまめに茶園を巡回し、適切な管理作業を行いましょ

1 秋肥の施用と土づくり

秋肥の施用時期が遅れると耐寒性が高まらず、秋冬期の急激な低温により寒害(幹割れ・冬芽の凍害等)を受けやすくなりますので、中山間地域や寒害を受けやすい品種や幼木園では9月上旬までに、それ以外では9月中旬までに、土壌診断の結果を考慮し地域の施肥基準に準じて施用しましょう。また、土壌が固く根量が少ない茶園では、9月上旬までに10a当たり堆肥1~2tを施用し、軽く耕うんを行いましょ

2 病虫害の防除

秋芽が硬化していない茶園では、長雨等により炭疽病やもち病が多発します。一葉期頃に予防効果の高い薬剤を、三葉期頃に治療効果の高い薬剤を散布します。

なお、秋芽萌芽期に降雨が多く殺菌剤の散布ができなかった場合は、秋芽三葉期頃に予防剤と治療剤を混用して散布すると安定した防除効果が期待できます。

また、網もち病の多発が予想される際は、四~五葉期に治療効果のある薬剤を追加散布します。

害虫ではチャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、カンザワハダニ等の吸汁性害虫とハマキムシ類の発生が多くなるため、茶園をよく観察し適期防除に努めましょ

(竹田 博文)

◆しいたけ

1 原基づくり

9月から10月は、しいたけのもととなる原基の形成が盛んな時期で、今後のしいたけ発生量に大きく影響します(原基は20度前後で最もよくできます)ので、原基の形成促進のため、光の確保に加え、十分な散水を行うなどほだ木の水分補給に努めましょ

2 ほだ場の準備

秋以降のほだ起こしに備えて、ほだ場の選定と整理が必要です。ほだ場には、風当たりの少ない暖かい場所(南東斜面)で、排水が良く、適度の湿度が確保でき、日光がチラチラ差し込む林内が適しています。散水のための水源が確保できれば、なお良いです。

スギやヒノキ林のほだ場では、間伐や枝打ちを行い林内を明るくし、光や降雨の入りやすい環境にするとともに、風の強い場所では、発生量等にも影響(特に厳冬期)が出ますので、防風垣や防風ネットを設置するなど環境改善に努めましょ

(田畑 美香)

◆たばこ

今月は、葉たばこ販売に向けての出荷規格の確認と、来年作に向けた準備が主な作業となります。

1 販売に向けた事前確認

出荷前に必ず異物・異臭・水分の確認と、土砂付着や褐変葉等の手入不足がないか、出荷包の事前確認を行きましょう。

また、普通系に色損系（グレー葉・汚れ葉等）が混入していないかの確認も行い、混入している場合はピッキングを行きましょう。

貯蔵害虫については、成虫や食害痕、排泄物がないか確認を行きましょう。発生を確認した場合は、速やかに耕作組合へ連絡し、適切な処置を行って下さい。

確認作業は、晴天日に行い、吸湿による品質低下がないようにしましょう。

2 良質堆肥の増産

良質堆肥10a当たり1200kg以上の使用へ向けて、堆肥の材料を十分に確保しましょう。また、未熟堆肥投入を避けるためにも定期的に切返しを行い、腐熟促進を図りましょう。

3 病害防除対策

病害の耕種的防除の徹底を図るためにも夏期耕耘（最低深耕一回・耕耘二回以上）を行い立枯病等、土壌中の病原菌密度低減や土作りに努めましょう。

また、土壌改良や肥料設計の参考にするために、土壌検定を行きましょう。

（宮崎県たばこ耕作組合）

◆農作業安全

まだまだ、残暑が続いています。こまめな水分補給と休憩を行い、熱中症を予防しましょう。対策の詳細は、宮崎県農政水産部ホームページひなたMAFINをご覧ください。

<https://hinatamafin.pref.miyazaki.lg.jp/soshiki/nogyohukyugijutuka/2285.html>

内容の詳細について

9月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び山村・木材振興課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

<http://nogyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>

向こう 1 カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稻	いもち病(葉) 紋枯病	並 並	上位葉に葉いもちが多く見られる場合、降雨が続くと穂いもちに進展しやすくなります。ほ場の様子を観察し、発生が多い場合には穂ぞろい期の防除を徹底します。 トビイロウンカの発生は平年よりやや少ない状況ですが、9月の気温が高いと、短期間に増殖することがあるので、ほ場での発生状況に注意します。
	トビイロウンカ (秋ウンカ) 斑点米カメムシ類	やや少 並	斑点米カメムシの加害をうけると等級低下につながりますので、穂ぞろい期とその7~10日後の2回防除を徹底し、発生が高密度の場合はさらに追加防除を行います。
施設果菜類	ウイルス媒介虫 (アブラムシ類、アザミウマ類、タバココナジラミ類等)	—	アブラムシ類やアザミウマ類、タバココナジラミ類により媒介される種々のウイルス病は、生育初期に感染すると大きな被害をもたらします。媒介虫への対策として、施設開口部への防虫ネット設置や定植時の薬剤施用など、総合的な防除を徹底します。 MYSVを媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底します。発病株は伝染源となりますので、速やかに抜き取ります。
	キュウリ黄化えそ病(MYSV)	—	
野菜類等	ハスモンヨトウ タバコガ オオタバコガ	並 多 多	タバコガ、オオタバコガの発生が多くなっています。ほ場を定期的に見回り、早期発見と若齢期の防除に努めます。 施設栽培では施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の飛来を防止します。
促成いちご	炭疽病	—	苗からの持ち込みによる発生が見られるので、定植前に防除を徹底します。また、苗床で発病を確認したら、周囲の株(半径3ポット)も感染株と見なして廃棄し、健全苗のみを定植します。
さといも	疫病	—	台風通過や豪雨の後に発病が拡がりやすいので、今後の気象に留意しながら、薬剤による適期防除に努めます。
かんしょ	基腐病	—	発病株の残さは、次年度の伝染源となるため、収穫後の残さをほ場や周辺に残さないようにしましょう。
果樹全般	チャバネカメムシ※ ツヤカメムシ ※	やや多 やや多	県内5箇所に設置した予察灯への誘殺数は、平年より多い状況が続いています。果樹カメムシ類は、園外から飛来してくるので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努めます。
カンキツ類	かいよう病 黒点病	やや多 やや多	いずれの病害についても、降雨が続く場合は、雨間を利用して防除適期を逸しないように散布します。
	ミカンハダニ チャキイロアザミウマ	並 並	ミカンハダニは、発生初期段階(寄生葉率30%、1葉当たり雌成虫数0.5~1頭)で防除することがポイントです。
茶	炭疽病※ 輪斑病	やや多 やや少	炭疽病が多くなっています。秋芽の生育期に降雨が続く場合には、生育初期から7日間隔で2~3回防除します。
	チャノカクモハマキ チャハマキ チャノホソガ カンザワハダニ チャキイロアザミウマ チャノミドリヒメヨコバイ クシカガラムシ	やや多 並 並 多 やや多 やや多 やや少	カンザワハダニの発生が多くなっています。向こう1ヶ月の気象予報では気温が高い予想となっており、本虫の発生に好適な条件が予想されます。ほ場を見回り、低密度のうちに防除を行うとともに系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。 チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイの発生が多くなっています。秋芽の萌芽~1葉期、2~3葉期の2回防除を行います。
<p>1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) ※は注意報を発表済みです。</p> <p>3) 病害虫防除肥料検査センターのHPアドレスは、QRコードより閲覧してください。</p>			